

初診時の両親の申告は、1才の時先天性胆道閉鎖症で手術を受けた、であったが、上部消化管透視、内視鏡 ERCP などにより上記と診断し昭和58年7月14日、胆嚢・総胆管切除、総肝管空腸吻合 (Roux en Y) を施行した。術後膵液嚢を合併したが約1年後、瘻孔・空腸吻合により治癒せしめた。

34) 再手術を要した小児先天性胆道拡張症 3例 (嚢腫腸管吻合術施行例) の検討

内藤万砂文・岩淵 真  
 広田 雅行・内藤 真一 (新潟大学小児外科)  
 松田由紀夫・八木 実

先天性胆道拡張症はひろい年齢層にみられる疾患であるが発癌性、膵管胆管合流異常等の問題もありその術式には変遷がみられた。当院において本症小児例を昭和30年より37例経験した。昭和47年以後は全例に嚢腫摘除術が行われたが、初期の16症例に対しては嚢腫腸管吻合術が行われ、そのうち3例が再手術をうけ嚢腫摘除、肝管腸管吻合が行われた。この3例を呈示する。症例の概略は以下の通りである。

症例1: 16才女子。初発は腹部腫瘍で生後5ヶ月で初回手術。15年後に腹痛、発熱のため再手術となる。

症例2: 15才女子。初発は黄疸、灰白色便で生後3ヶ月に初回手術。15年後に腹痛、発熱のため再手術となる。

症例3: 10才女子。初発は腹痛、腹部腫瘍で10才で初回手術。1ヶ月後に発熱のため再手術となる。

35) 胆道拡張のない胆管・膵管合流異常を合併した胆嚢癌の1切除例

斎藤 六温・坪野 俊広 (刈羽郡総合病院)  
 関矢 忠愛・植木 光衛 (外科)  
 本間 保 (同 内科)

当科における過去5年間の胆嚢癌手術症例は20例であり男女比は1:3、平均年齢は71才(43~83才)と他の報告と同様であった。切除例は10例(50%)で術前正診率は60%であり誤診例は胆石症・胆嚢炎の診断であった。切除例中無石は1例のみであった。20例の胆嚢癌症例中、胆管膵管合流異常併発は1例であった。症例は62才女性。主訴は心高部・背部痛であった。胆道拡張を併わない。共通管が3.5cmの複雑な合流異常を合併した胆嚢癌の術前診断で肝床部楔状切除併施の胆嚢摘出術・リンパ節郭清(R<sub>2</sub>)を行った。術中胆管内及び胆嚢内胆汁アミラーゼ値は各々107460uと4110uと高値であった。胆嚢内には小さなビ系石があり癌腫の肉眼型は結節型(3.0

×2.0×2.0cm)組織型は乳頭腺癌と管状腺癌が混じていた。術後1年2ヶ月の現在再発の徴候なく健在である。胆道拡張を併わない合流異常は初発症状が胆嚢癌によるものが多く切除例は少ない。合流異常例は注意深い経過観察が必要である。

36) 胆嚢癌症例の検討

滝井 康公・福田 稔 (白根健生病院)  
 広田 正樹 (外科)

昭和55年~昭和60年の6年間に、当白根健生病院において経験した胆嚢癌症例は23例であったので報告します。その内分けを見ると、男性4例、女性19例と女性に多く、男女とも60歳代にピークがあり、平均年齢は68.3歳でした。

Stage別では、Stage I 11例(7例)、Stage II 5例(2例)、Stage III 3例(1例)、Stage IV 4例(0例)、(カッコ内生存例)生存例は、23例中10例で、43%の生存率であった。また、胆石保有例は、23例中13例、不明3例を除き、65%の保有率でした。

その他、これらの症例につき、文献的考察を加え、報告します。

37) 当科における胆嚢癌手術例の検討

斎藤 英樹・丸田 有吉 (新潟市民病院)  
 藍沢 修・桑山 哲治 (第一外科)  
 山本 睦生・若佐 理

過去約12年間に当科において手術を行った胆嚢癌68例について検討し以下の結果を得た。

(1) 60才台が22例と最も多く、男女比は1:3.2で女性に多かった。切除例の胆石合併率は70%で、そのうちコレステロール胆石が79%を占めていた。

(2) 超音波診断装置を使用してから治癒切除例が飛躍的に増加した。

(3) 胆嚢癌取扱い規約に従って肉眼的進行度を分類すると、Stage I が10例、Stage II が4例、Stage III が9例、Stage IV が45例であった。

(4) Stage I の5年生存率は87.5%であったが、Stage II, III, IVでは5年以上の生存はなく、3年生存率はそれぞれ33.3%, 12.5%, 2.6%であった。

(5) 切除例は40例、切除率は59%で、そのうち治癒切除例は21例、治癒切除率は52.5%であった。

(6) 治癒切除例の5年生存率は45%であったが、非治癒切除例では3年以上の生存はなく、3年生存率は10.5%であった。

(7) リンパ節転移と壁深達度は予後と密接に関係し、

治癒切除例の n(一) 群の5年生存率は53.5%であり、又、m, pm 群は全例生存していた。

(8) Bin f 2, 3 にたいする放射線療法を検討したところ、姑息的に腫瘍を切除し放射線治療を行った群に延命効果が認められた。

### 38) 当科における胆道癌症例の検討

藤田 敏雄・伊藤 博 (厚生連糸魚川病院)  
穂苅 市郎・島田 一郎 (外科)

昭和59年4月より、当科で取り扱った胆道癌症例は12例で、胆管癌8例、胆嚢癌4例であった。胆管癌8例の癌占居部位別内訳は、肝門部胆管癌1例、中部胆管癌4例、下部胆管癌3例であった。肉眼的癌進行度は、Stage IV 症例が8例中5例で、5例全例が上・中部胆管癌であった。切除症例は8例中6例で、治癒切除術となったものは4例であった。予後は、生存中6例で、最長生存例は1年である。

一方、胆嚢癌症例は2例が Stage I, 他2例が Stage IV で、Stage I の2症例に治癒切除術が施行された。病理組織学的には、癌深達は1例が m, 他の1例も SS 症例で、共にリンパ節転移もなく、予後も9カ月及び1年2カ月生存中である。

### 39) 当科で経験した肝・胆・膵領域癌の検討

大溪 秀夫・白井 良夫 (立川総合病院)  
唐仁原 全 (外科)  
伊賀 芳朗・内田 克之 (新潟大学)  
岡村 直孝・遠藤 和彦 (第一外科)  
西巻 正・佐々木公一

当科において過去2年半で経験した、肝・胆道・膵領域癌は25例である。その内訳は、肝癌:2例、胆のう癌:10例、胆管癌:5例、十二指腸乳頭部癌:2例、膵癌:6例であった。

肝癌は2例ともに肝切除を行ったが、1例は直死であった。残る1例は術後2年健在である。胆のう癌は5例に切除を行い、2例に肝床切除を伴う根治手術している。2例は術後の組織で胆のう癌と診断された。非切除例は全例 Stage IV で再発死している。切除例は4例健在である。胆管癌は2例に PD が行われているが、1例は1年4カ月で再発死、1例は4カ月生存中である。非切除例は3例とも死亡。乳頭部癌は1例に PD + rt. hepatic lobectomy (H<sub>2</sub> のため) 行った。しかし、1年で再発死している。膵癌は2例に膵全摘、1例に体尾部切除を施行。術後、2年5カ月に筆頭に健在である。非切除例は3例とも死亡。肝癌の1例を供覧する。1年間で胆石、肝癌、右結腸癌で3回手術した症例である。

### 40) 県内胆道癌調査結果

#### 一胆道癌危険因子解明の試み一

加藤 清・赤井 貞彦 (県立ガンセン)  
島田 寛治・佐々木 寿英 (ター新瀉病院)  
佐野 宗明・田島 健三 (外科)  
筒井 光広

県内胆道癌外科症例のアンケート調査を行い、昭和57~59年3年間の胆嚢癌312例(男89例、女223例)、胆管癌300例(男150例、女150例)について集計した。保健所管内別分布では胆嚢癌は津川>新津>村上>長岡管内に高く、胆管癌は栃尾>村上>新潟>六日町・十日町管内に高かった。

これら症例中の胆嚢癌70例(男24例、女46例)、胆管癌54例(男29例、女25例)に50項目余のアンケート調査を行い、各項目毎に健常人と比較した相対危険度の近似値(Odds 比)を求め、有意性検定を行い1対1の症例対照研究による胆道癌危険因子の解明を試みた。

胆嚢癌では胆石の既往、妊娠、出産、授乳、井戸水(昔)、インスタントラーメン類、米飯の回数が高危険度を示し、魚、肉、卵、牛乳、野菜、果物、水道水(昔)が低危険度を示した。

胆管癌では胆石・肝臓病の既往、痩せ、山菜が高危険度を示し、魚、肉、バター、野菜、果物、肥満が低危険度を示した。

### 41) 進行膵癌に対する術中照射療法

阿部 要一・霜田 光義 (富山医科薬科大学)  
鈴木修一郎・榑淵 統一 (第二外科)  
桐山 誠一・田沢 賢次  
藤巻 雅夫

伊藤 博 (新潟県厚生連 糸魚川病院外科)

進行膵癌16例に対しライナック電子線による術中照射療法を施行し、その意義について検討した。対象は Stage IV の進行癌で、肝転移(H)、腹膜播腫(P)を6例に認めた。切除2例のうち1例は膵全摘の数週間前に40 Gy の照射をし、他1例はPD後 SMA 根部を中心とした後腹膜へ40 Gy 照射した。非切除14例中3例に30 Gy, 11例に40 Gy の術中照射、術後7例に2~30 Gy の体外照射を追加した。除痛効果は75%に認められ、腫瘍マーカーは照射前高値例では照射後に全例減少した。術後1年以上生存は4例で、1例はPD 施行後1年4カ月生存中、他3例は非切除で、40 Gy の術中照射に30 Gy の術後照射を加えた。H, P 陰性例である。